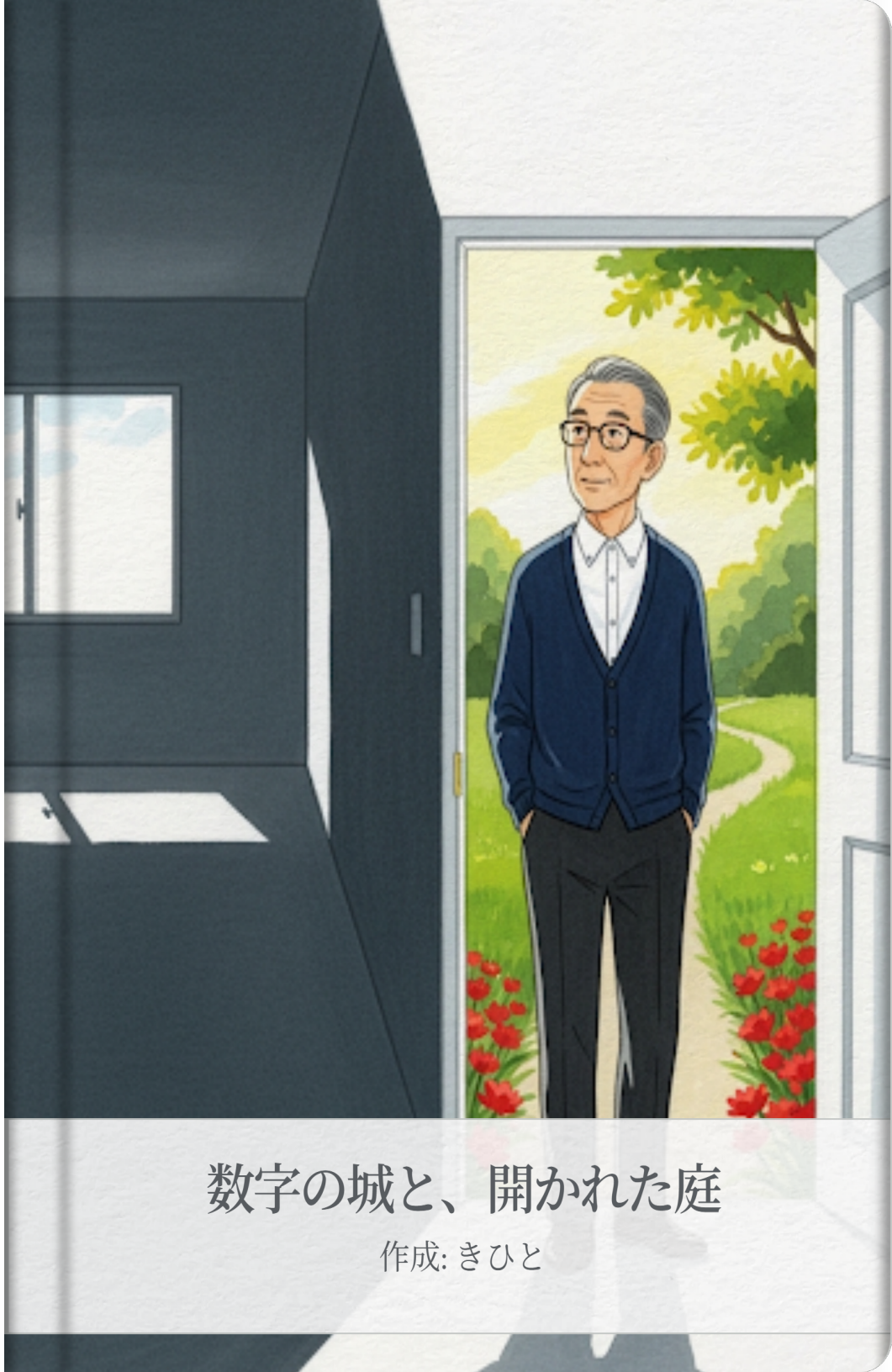
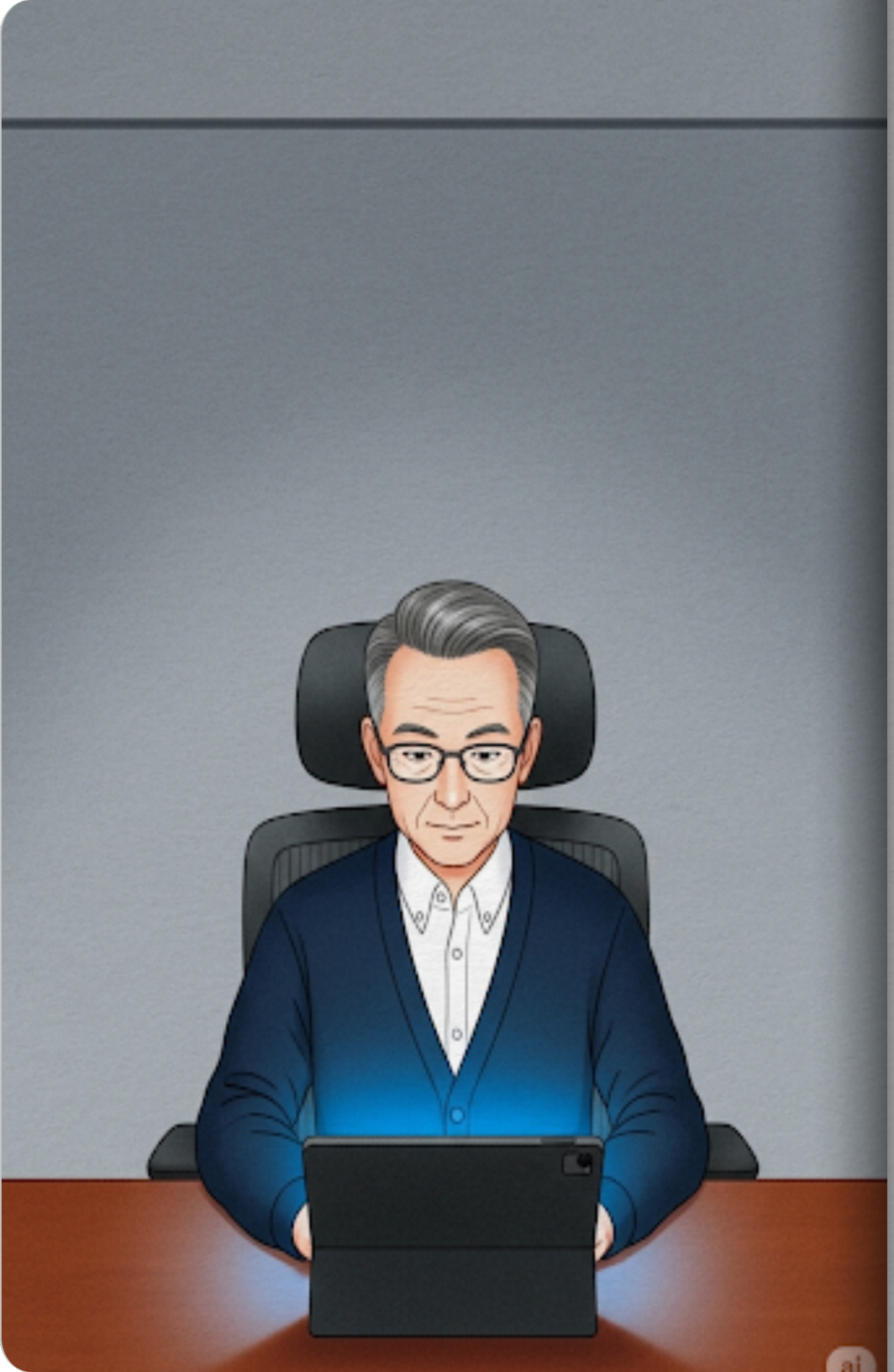


数字の城と、開かれた庭

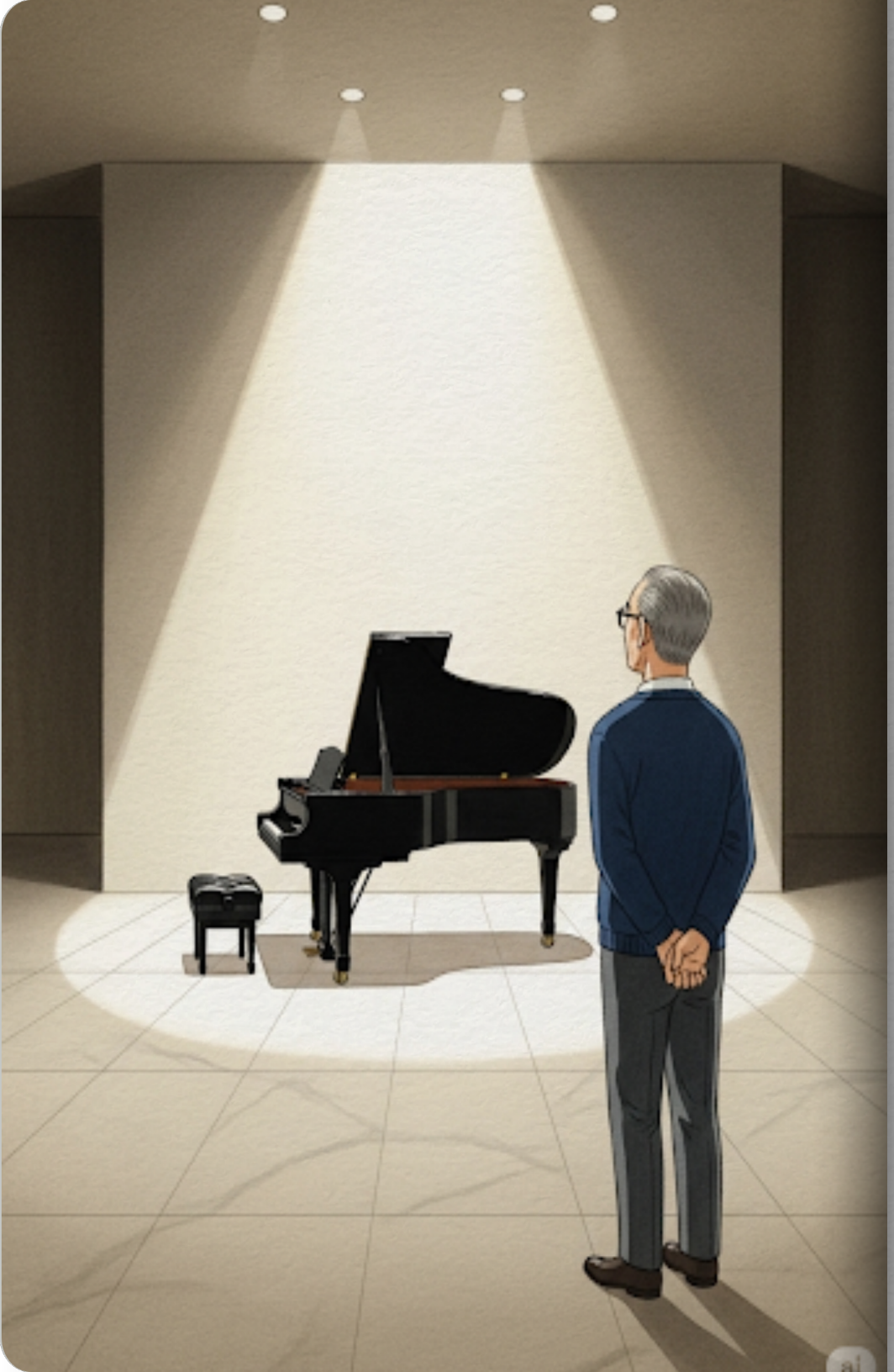
作成: きひと



ヒロシは、積み上げることが得意でした。若いうちから懸命に働き、節約し、投資を続けました。彼にとって、タブレットに表示される資産残高の数字が右肩上がりに増えていくことは、人生で最も確かな「正解」でした。その数字が増えるたび、彼は自分が硬い鎧で守られているような、強い安心感に包まれるのでした。



やがてヒロシは現役を退きました。手元には、一生かかっても使い切れないほどの「数字」が残りました。しかし、いざそのお金を使おうとすると、心に冷たい風が吹き抜けます。通帳の数字が1円でも減ることは、彼にとって「失敗」や「無防備」になることのように感じられたのです。かつて自分を守ってくれた数字は、いつの間にか彼を閉じ込める見えない檻に変わっていました。



彼は何年も前から欲しかった、最高級のグランドピアノの前に立ちました。それを買う資金は十分にあります。しかし、指先が鍵盤に触れる前に、彼の頭の中では減ってしまう残高のグラフが鮮明に浮かびました。「もし、将来足りなくなったら？」「これはただの贅沢ではないか？」という罪悪感が、彼の背中を凍りつかせました。彼は結局、一度も音を鳴らさずに店を後にしました。



そんなある日、姪のミオが彼を訪ねてきました。彼女はバックパック一つで世界中を歩き回り、見たことのない景色を語る自由な女性でした。整然としているけれど、どこか血の通っていないヒロシの家を見て、ミオは静かに言いました。「おじさんの家は、まるできれいな博物館みたいね。でも、ここには『今』という時間が流れていないみたい」



ミオはカバンから、小さなガラスの瓶を取り出しました。中には茶色い小さな種がぎっしりと詰まっています。「ねえ、おじさん。この種を瓶の中に閉じ込めておけば、100年経っても100粒のままで、一粒も減らないわ。それはとても安全で、確実なことよね」ミオは瓶を光にかざして、いたずらっぽく微笑みました。



「でもね、種は土に埋めて、水を与えて、初めて価値が生まれるの。花が咲き、実がなれば、元の種はなくなってしまう。でも、その代わりに得られる香りや味、そして誰かと過ごす豊かな時間は、瓶の中の種には一生味わえないものよ」ミオの言葉に、ヒロシは胸の奥を突かれたような衝撃を受けました。



その夜、ヒロシは再びタブレットを開きました。並んでいる数字は、今までは自分を守る「盾」だと思っていましたが、今は「植えられなかった種」の山に見えました。数字は単なる可能性に過ぎず、それを使って何かの経験に変えない限り、ただの無機質な記号でしかない。彼は、自分の人生を数字を積み上げるためだけに費やしてきたことに気づいたのです。



ヒロシは震える指先で、一つの予約を入れました。それは、ミオが以前話していた、美しい夕陽が見える海辺のホテルのチケットでした。数字が減る恐怖が完全に消えたわけではありません。でも、それ以上に「このまま一度も咲かせずに種を腐らせてしまうこと」の方が、ずっと恐ろしいことだと今の彼は知っていました。



ヒロシはもう、通帳の数字を見て一喜一憂することはありません。彼にとっての本当の資産は、どれだけ貯めたかではなく、どれだけ豊かな時間を過ごし、誰を笑顔にしたかという「思い出の総量」になったからです。彼は今、自分の人生という庭にたくさんの花を咲かせながら、穏やかな夕暮れ時を心から楽しんでいます。